# 近世沖縄和歌集

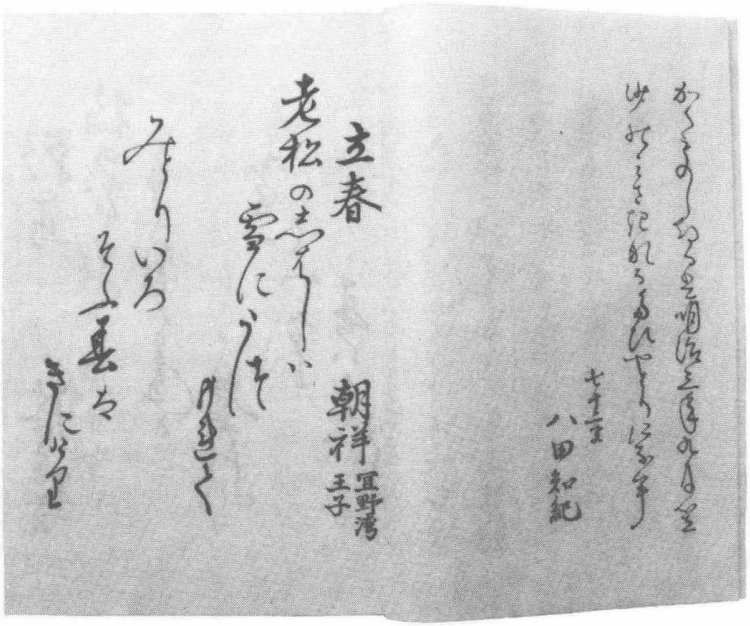
# 近世沖縄和歌集　本文と研究

一九九〇年五月一五日発行

池宮正治
編者　嘉手苅千鶴子
外間愛子
発行者　西平守栄
発行所　ひるぎ社
〒九〇三　沖縄県那覇市首里石嶺町
一―一二七
電話（〇九八八）八四―四三二一
印刷・製本　㈱南西印刷

近世沖縄和歌集

江苏工业学院图书馆
藏书章

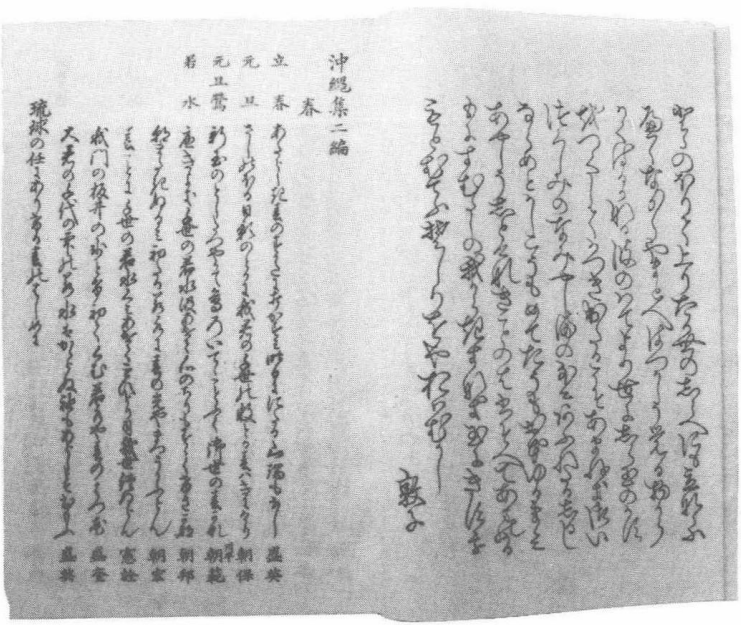


立春

朝祥 宜野湾王子

八田知紀

『沖縄集』



沖縄集二編

春

立春

元旦

元旦雪

若水

朝保

朝範

朝邦

朝宣

恵祉

盛英

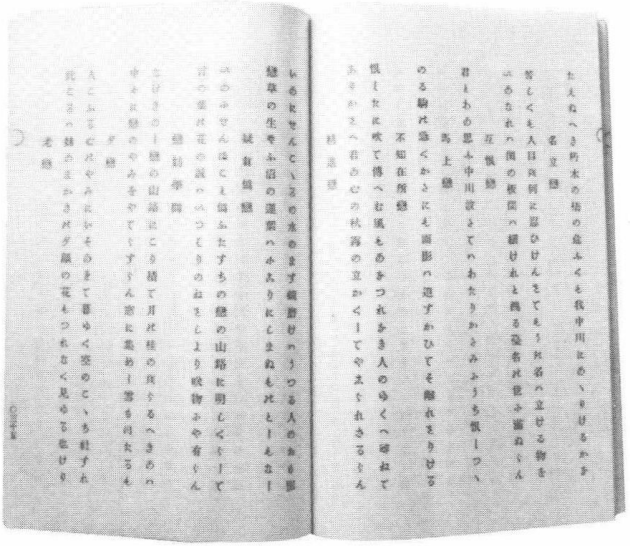
盛奎

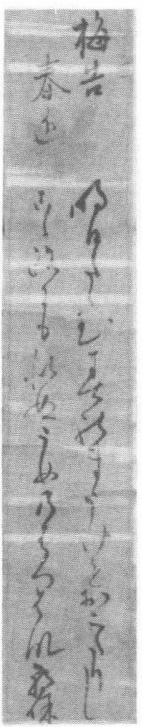
盛恭

『沖縄集二編』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『松風集』





宜湾朝保和歌短冊「梅告春迎」（那覇市　沖縄県立博物館蔵）

明日たゝむ春のまうけもおこたりし　こゝろにも似ぬうめのはつはな（「松風集」四八六番歌）

宜湾朝保和歌短冊「郭公遍」（那覇市　沖縄県立博物館蔵）

いつのまにさとなれにけん郭公　人伝だにもまれにきゝしを（「沖縄集二編」三二三番歌、「松風集」二四〇番歌）

# 近世沖縄和歌集　目次

解説
一、書誌と編集……9
1　沖縄集……9
2　沖縄集二編……19
3　松風集……30
二、編者……36
1　宜湾朝保……36
2　護得久朝置……40
三、薩摩歌壇との交流……44
1　松操集と沖縄……44
2　八田知紀……50
3　福崎季連……56
参考文献……61

近世沖縄和歌集

凡　例……64
沖縄集……65
沖縄集二編……79
沖縄集二編　上……82
沖縄集二編　下……219
松風集……288
初句索引……388
歌人別　名索引……464
歌人別　歌索引……467
あとがき……478

# 解

# 説

# 一　書誌と編集

## 1　沖縄集

板本。明治三（一八七〇）年刊。宜湾朝保編。墨付二十二丁。まず見返し中央に「明治三年／庚午上梓」と、角印のように刷られている。次に一丁オモテから二丁ウラにかけて朝保の師八田知紀の序文がある。続いて三丁オモテから二十丁ウラまで、つまり宜野湾王子朝祥の「立春」の歌から、山内盛富の「庭上鶴」の歌まで、三十六人の歌人の歌を、一頁に一人一首ずつ収めている。筆跡は編者宜湾朝保本人のもので、二十丁ウラ左下に「宜野湾朝保書」と明示してある。引き続き二十一丁オモテから二十二丁オモテにかけて、樺山資雄の跋文があり、そのウラに「鹿児島藩御蔵版書取次所／製本所／浪華書肆／弘済堂／相屋九兵衛」と奥付がある。鹿児島藩を通じて大阪の本屋弘済堂相屋九兵衛の店から出版されたものであることがわかる。

本書は三十六人の歌人の歌各一首を収めているため、別名「沖縄三十六歌仙」とも言われる。また本書が、朝保によって周到に用意され、丹精して編集されたことが、本書を注意深く見れば良く了解される。

まず『沖縄集』全体の構成を見てみよう。三十六首の題詞は次のようになっている。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1 立春（春）
2 朝鶯（春）
3 梅（春）
4 窓前梅（春）
5 柳（春）
6 帰鴈（春）
7 旧宅花残（春）
8 春駒（春）
9 里山吹（春）
10 隣家藤（夏）
11 夕卯花（夏）
12 葵（夏）
13 聞荻（秋）
14 嶺月（秋）
15 卯月の十日あまりよし野にまかりて（夏）
16 五月雨（夏）
17 もろこしにて九月十三夜の月を見て（秋）

18 菊（秋）
19 月下擣衣（秋）
20 木村法橋より浦添親方に高雄の紅葉とておくられしを見て（秋）
21 山時雨（冬）
22 落葉（冬）
23 篠上霜（冬）
24 千鳥（冬）
25 雪（冬）
26 旅宿歳暮（冬）
27 恋の歌よみける中に（恋）
28 寄虫恋（恋）
29 寄舟恋（恋）
30 山家（雑）
31 寄露無常（雑）
32 定水和尚の庵室を訪て（雑）
33 竜洞寺にて心海上人をおもひやりて（雑）
34 慶隆が十三回忌の追善に（雑）

35　北京を立出るとて（雑）

36　庭上鶴（雑）

これを表にまとめると次のようになる。

| | 歌　番　号 | 合計（首） |
|---|---|---|
| 春 | 1、2、3、4、5、6、7、8、9 | 9 |
| 夏 | 10、11、12、15、16 | 5 |
| 秋 | 13、14、17、18、19、20 | 6 |
| 冬 | 21、22、23、24、25、26 | 6 |
| 恋 | 27、28、29 | 3 |
| 雑 | 30、31、32、33、34、35、36 | 7 |

※　ただし10「隣家藤」をひとまず夏に分類しておく。

四季（春夏秋冬）・恋・雑といった分類は、『古今集』以来の伝統的なものであるが、この小さな歌仙形式の歌集にも勿論これが踏襲されている。しかもこの四季も、時期の変化、移ろいにまで細かく気を配っている。たとえば春の部は、1の「立春」から9の「里山吹」まで、それぞれの時期の変化に応じて配列され

ている。次の「隣家藤」は、今回は便宜的に夏に分類しておいたが、「藤」は晩春から初夏にかけての季題で、したがって春でも夏でもいずれにも分類される。

ところで、こうした限ずみまで気を使った編集であるにもかかわらず、秋の14「嶺月」の次に、夏の15「卯月の十日あまり……」と、同じく夏の16「五月雨」が入っているのはどうしたことだろうか。私が底本とした県立図書館所蔵のA本と、もう一本のB本も同様の順序である。他に証本がなくこれ以上わからないが、二本から想定できることは、製本上の誤りではないか、ということである。季節の境界の季題ならともかく、そうでもないものが他の部立の真中に入ることはあり得ない。それ故混入であることは明らかであるが、二本しか見てなくて断言は控えるとして、この限りでは製本上のミスと考えざるをえない。つまり15・16番歌のちょうど一丁が錯簡状態になっており、正すとすれば、この一丁を12の「葵」の次に入れるとよい。

無論春の部だけでなく、夏秋冬にも恋の部にも季節の移ろいに対応した細やかな配慮が払われているが、これ以上触れない。朝保の編集上の苦心が伺えればよい。

『沖縄集』の三十六人の歌人の過半は、琉歌人としても知られ、また王府政権の中枢にいた有名人が多い。ところが古堅政樹、豊見城盛昌、糸洲賀郁、奥間朝建、世名城盛郁、豊見城盛政、内間良恭、野村朝英、具志幸博、山口宗政などは、『沖縄集』のこの一首が知られるのみで、むろん伝記についてもまったくわかっていない。なぜこれらの人が近世沖縄を代表する歌人に選ばれたのか、その基準はいかなるものであったのか、と言ったことは、まったくわからない。はたして右の歌人はそれだけの実績のあった歌人

であったのだろうか。今日残された資料からはこれを証するものがない。逆に、友寄平敷屋事件に連座した人々が師事していたと思われる屋良宣易やそのまわりの人たち、平敷慶隆の十三回忌に集まり追悼の和歌と和文を残している人たち（『浮縄雅文集』）、また組踊の創始者玉城朝薫にも和歌と和文が伝えられており、これらの人を加えても不可はあるまい。さらに言うと、平敷屋朝敏の弟子と言われる『雨夜物語』の著者久志親雲上、この人とは別人と思われるもう一人の久志親雲上とよばれる、薩藩の『松操集』に出て来る人物、天保三（一八三二）年江戸上りの時、正使急死により急拠正使豊見城王子朝典となり往還に和歌を残して、無事職責をはたした普天間親雲上（後に三司官、向寛・兼城親方朝典）、『中山聘使略』（一八三二年）などに「忍恋」一首のみえる真壁親方賢寛など、あるいは楽童子たちの歌も若干伝えられている。まとまった歌集こそないものの、知られている歌人は少なくはない。要はこうした我々の知っている人物を排して、今日無名の朝保が選んだ十余人の選択の基準根拠のことであるが、今となっては明確にそれを知る術がない。むしろこの十余人の歌をこのような形で残したことを感謝すべきなのかも知れない。

三十六人の内訳をみると、王子が五人、按司が四人、親方が十一人、親雲上が十五人、僧が一人になっている。中心的な担い手であったと思われる親雲上が十五人というのは、一見多いように見えるが、割合と実績から言えばかなり少ないとも言える。朝保が三司官であり、身分制社会に生きていることを考慮すると、王子や按司、あるいは親方位の人に厚くなったにしても、ある程度やむを得ないことだったのかも知れない。肝心な点は、何よりもまず採択された作品が妥当かどうかである。良い作品を選んでいるかどうかが問われなければならない。この点では、おおむね妥当な作品を選んでいると言えよう。調べのなだらかな桂園

派好みの作品が採られている。

他の有名な歌人、と言っても生歿年がわかる程の人は二十人くらいのもので、これらの人は拙著『近世沖縄の肖像―文学者・芸能者列伝―』（一九八二年、ひるぎ社）にやや詳しくそれぞれの伝記をまとめてあるので、それに譲り、ここでこれ以上繰り返さないが、見てわかるように、近世の沖縄にあっては、編者の朝保は言うまでもなく、専門的な歌人は一人も出ていない。すべて余技であり教養の範囲である。しかし本土と同じく師弟の契りを結んで歌道に励むこともあったらしい。

和歌を含めた、いわゆる大和芸能は、これまで考えられていた以上に賑わっていたらしく思える。ところが和歌はそれほど伝えられていない。まして近世には『沖縄集』『沖縄集二編』のほか、他に編まれたことも、まして刊行されたこともまったくない。漢詩集が個人詩集を中心に夥しく刊行されたことと比較してあまりに貧しい。

こうしたことも手伝って『沖縄集』の各歌の出所は、明らかでないものが多い。と言うより明らかなものがはなはだ少ないのである。たとえば浦添朝熹の「旧宅花残」の歌は、天保十三（一八四二）年に即位慶賀正使として江戸上りした時に、京都の香川景樹に歌評を求めた時の詠草中にあったものである（詳しくは拙稿「浦添朝熹の作品と若干の問題」　琉球大学法文学部紀要〈国文学論集〉第二十九号　一九八五年四月参照）。

識名盛命の一首は、元禄十三（一七〇〇）年に盛命が上麗した時の紀行文『思出草』から採られたものである。『沖縄集』には「卯月の十日あまりよし野にまかりて」と詞書があるが、『思出草』には「吉野の原の



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com